

【総 説】

乳幼児におけるライノウイルス感染症

—RSウイルス感染症との比較—

いずみ 泉 のぶ お 夫

キーワード：ライノウイルス，RSウイルス，乳幼児
出生児コホート研究，細気管支炎

要 旨

病原診断にPCR法の手法が用いられ、乳幼児期のライノウイルス（RV）感染症の実態が明らかになってきた。地域の出生児の乳児期あるいは2歳未満の気道感染症の前向きコホート研究では、軽症も含めると、RVはRSウイルス（RSV）を超え第1位に多い。乳児期前半で冬季であっても、あるいは、wheezeを伴っても入院を要しない場合はRVが多いとする報告もある。しかし、wheezeを伴って入院を要する重症児の報告では、乳児前半ではRSVによるものが明らかに多い。だが、その後は、RVはRSVに匹敵するか、あるいはそれを超えて重要になる。RVの幼児期の重症化にはアトピーとの関連が窺われる。

はじめに

気道感染症の病原診断にPCRなど分子学的手法が導入されてから十数年が経ったが、これによりライノウイルス（以下、RV）、コロナウイルスなど、従来の方法で検出感度の低かったウイルスの臨床上の重要性が大きく増した。RVは感冒の病原として知られていたが、成人ではその大多数を占めることがわかった。また、年長児や成人では気管支喘息の急性増悪の原因ウイルスとして

最重要であることは周知のこととなった¹⁾。

他方、RSウイルス（以下、RSV）は乳幼児においては、生後二冬を経ればほぼ全ての児が罹患するとされ、また乳幼児に特徴的な細気管支炎の最大の病原ウイルスとされてきた²⁾。

乳幼児期におけるRV感染症の位置付けとしては、肺炎をきたしうるものが従来から知られ、PCR法によりその重要性が増したものの、あまり解明されていなかった。

最近、地域の出生児の乳幼児期の気道感染症のコホート研究の報告が相次いでなされた。日常診療における気道感染症の病原の実態を知る上で貴重であるが、いずれの報告もRV感染症の比重